



エル動物病院長

(舟橋村)

佐渡 啓樹

獣医療も日々進化し、時に今までの常識が覆されることがあります。猫伝染性腹膜炎（FIP）という病気は長年にわたり治療困難な病でしたが、この数年でその壁が崩れつつあります。

FIPはウイルス感染症で、主に子猫が発症します。腹水や胸水がたまり食欲・元気がなくなる滲出型と、神経や内臓に肉芽腫を形成する非滲出型の二つのタイプがあります。

この病気の最も恐ろしい点は致死率が極めて高いことです。滲出型は数週間ではほぼ100%が亡くなる

猫伝染性腹膜炎



滲出型FIPにかかり、腹水がたまって食欲がなくなっていた猫。投薬により順調に回復している

なり、非滲出型も1年以内に多くが亡くなります。特に滲出型には有効な治療法がなく、獣医師はこの病気に対して非常に無力でした。

新薬開発 治療可能に

た。しかし、FIPウイルスに効果を示す抗ウイルス薬が新たに開発され状況が一変しました。FIP

また抗ウイルス薬だけでは治療が不十分で、経過を細かく観察し個々の病態にあわせたオーダーメイドな補助的な治療が必要な例も

にかかった猫を治すことが現実的なものとなりました。

最初は安全性や有効性に課題を抱え、その後の薬は医薬品としての承認がなく正規に入手ができないなどの問題が続きました。今では有効性が高いとされる抗ウイルス薬が複数あり、その中には国内で承認された医薬品もあります。

しかし、依然として問題は残っています。実際に抗ウイルス薬がFIPの治療に使われ始めてから数年しかたつておらず、長期的な安全性や再発率についてはまだ不明な点も多いのです。

多く存在します。それらの情報の蓄積がまだまだ不足しているのです。それでも今までも足も出さず死を待っただけだったFIPが、治らない病ではなくなりつつあることは大変喜ばしいことです。

治療が可能となったとはいえ、治療率は治療開始時の病状や発症からの時間などに大きく左右されます。特に体力のない幼猫は、食欲・元気がない、熱があるなど、調子が悪そうと感じたら早めに動物病院を受診しましょう。

毎月第1土曜掲載